

1980年代の半ば、当時は江東区にあった食糧ビルの3階、佐賀町エキジビット・スペースに初めて行った。古いビルの石の階段をトコトコ上がると、いきなり細長いレセプションデスクの置かれた無機質な広い空間に出会う。それまで現代美術といえば関西の貸画廊で狭いところで難しい話しをするもの、という環境に慣れていた私は大きな衝撃を受けた。無機的なばかりではなく、そこには歴史の重みもあり、年代を経たアーチ型の窓などが其処に流れる時間を呼び起こしていた。

すごい、此処は日本なんだろうかー、と思えるほどの堂々とした構え、インターナショナルな視点、一度で虜になった。

それから年代を経て、一度クローズした佐賀町が、アーカイブという名になって東京のダウンタウンで甦っている。そこでまた展示の機会を頂けることをとても嬉しく、光栄に思っている。

私が京都市立芸大を卒業したのは1978年だから、自分が学生だった頃現代美術はかなり静かな終息状態にあった。私が憧れる作家達は多くが1930-40年代生まれ、彼等が具象から抽象へと表現の道を探求していったのである。私は20年余り遅れて来た。だから、私が始めようとした時にはもう全ては為されていて、モダニズムの終わりなる意識が支配的であった。自分は、それをスタートにせざるを得なかった。私はモダニズムが好きである。

当時20代で Artist になりたかった私は簡単に貸画廊で個展を始め、そして当然数年で虚しくなり挫折した。1994年、私の再スタートの個展の機会を佐賀町エキジビット・スペースが提供してくれた。

1989年当時の夫の随行をしてニューヨークに滞在する機会があった。チェルシーのDIA ART FOUNDATIONで偶然見たドイツの作家の3人展が強烈に私の心をとらえた。Joseph Beuys はもちろん日本でもよく知られていたが、Imi Knoebel Blinky Palermoはこの時初めて遭遇した。彼等の仕事の根底に見える等身大の哲学的な思考の素地。アメリカのミニマルアートとはどこか違う、と、直感的に感じた。その頃はアメリカの情報ばかりで、ドイツについては何も知らなかった。なぜ、この3人が3人展を？ という、ある人からデュッセルドルフには有名な美術大学があり、ヴォイスは其処の教授、他の2人は彼のクラスの学生だった、と、教えられた。そのときから Kunstakademie Düsseldorf は、私の中で漠然とした憧れの学校となった。当時はもちろんドイツ語もできず、何の知識もなく、渡航する何の手だてもなかったが、いつかきっとこの人達と肩を並べてコツコツ仕事がしたい、という漠然とした夢を持った。

2000年、文化庁派遣在外研修員に選んでいただき、Kunstakademie Düsseldorfで研修生として学ぶ機会を得た。44歳のちょっとトウのたった学生ではあったが、その頃は言葉もできず、絵の具を何処で買うのか、展覧会は何処でやっているのか、さえ解らず若くて気さくな彼らに随分世話になった。

ようやく自分のアトリエを持ち、何とか発表が軌道に乗って来たのは2006年頃だから随分と時間がかかった。

私はアトリエにひとりで居る時間をとても大切に考えている。簡単な角柱や平凡な四角いキャンバスなどを一日中じっとみている。それはモノであって、未だ芸術ではない。それをどうやって芸術にするのか、それを壁にかけるのか、それを床に置くのか、その色を壁や床にも塗り広げるのか、それは存在しているのか、それはそうそのように見えているだけなのか、長いこと考えて、彩色の構図を決める。

彩色にはアクリル絵の具やピグメントばかりでなく、油や水彩、いわば物質自体が色を持ち合わせているものも使用する。

ミースファンデルローエハウスのデレクター、ノアクさんとその話しをした時、ノアクさんがミースもそうだった、と言ったので、ホッとして私は救われた。

今回のアーカイブでの展示のメインにはこちらではすでに何度も展示した黒いキャンバスと黒い枠の作品を設置する。佐賀町アーカイブには奥に可動壁があり、それを少しずかしてそこから窓の外光を入れ、そこに黒い枠の作品を設置する。

この枠だけの仕事は無限のイリュージョンのメタファーである。そしてそれと対峙する黒いキャンバスは言うまでもなく作品は絵画というモノであり、それがそこにある、というモノである。

私の作品は多くが2点以上の組作品になっており、それはそうした方が鑑賞者ばかりでなく、作品同士も対話ができる、と思うからである。一点作れば大抵その横にもう一点置きたくなり、それによって作品の意味や見え方が変わってゆくのが興味深い。鑑賞者には是非見比べながら時間をかけて味わっていただきたいと思っている。

結論めいた何かを作品が用意しているはずもない。そして、物語りもドラマもない。私が思う作品とは、無限の芸術に対する問いかけであり、その問いに小さな答えを見いだせるようなものを作りたい。

倉智久美子

[www.Kumiko-Kurachi.com](http://www.Kumiko-Kurachi.com)